

じゃくの八五郎

小木須のじゃくって言う所に、八五郎っていう人が住んでおったと。

その八五郎が、お盆の十三日に、お父っつあんに頼まれて町へ買い物に行ったわけだ。長坂の峠まで行ったら、赤げえ物が見えたんだとな、

「何だんべえ」

って、思って見たらば、狐が昼寝してんだと。

そこで、そうっと、はってって、いぎなり狐の寝てるすぐ下で

「ワンワン」

って、言っただと。狐はびっくりしたんだんべな。コロココロンって土手から落ちて行っただと。

「今日は俺の顔を見てねえがら、化かす事できめえ」と

八五郎は、得意な顔をして町まで行っただと。

買い物をして家^{うち}帰って来るとちゅうのごとだ。峠にきたらば、さっきの狐が道のまん中にいんだと。かくれて、よく見ていたらよ、じょうりの切れだのくわえて、くるりくるりと道で回ってんだと、

「これえ、狐めじょうりっぱだくわえて、くるっと回って化けるっていうけど、何に化けんだんべ」

って見ていたんだと。すると、狐は赤ん坊をおぶった、きれいな娘に化けたんだと。

「おや狐め女に化けた。どこへ行くんだんべ」

後をそろそろくっついて行ったら、上境の酒屋へ入ったんだと。

「いやあ暑かったんべ、よく来たなあー」

って、酒屋のおやじが言うわけだ。そんで後をつけて行った八五郎が、

「いやあそれ、娘だねえぞ、それは、長坂で化けた狐なんだから」

って、言ったと。そうしたところが

「何言うだ、これは狐だねえ。俺げがら嫁に行った娘だ。お盆で、お客様に来たんで、これは狐だねえ、家の娘だ」

「なあにおらあまちがえなく、よおーぐみてたんだから、それは娘だねえ、狐にちがい

ねえ」

「この野郎、家の娘が狐めだなんて、とんでもねえ野郎だ」
って言ったと。店先できいていた人に棒で叩かれてな、八五郎、殺されちまったと。

「ああー俵につっこんで、那珂川に放りこんじめえ」

それで、ゴボンゴボン流れたわけだ。

まず地獄へついたんだと、そしたれば、閻魔様に

「今日は、お盆の十三日で、仏様がみんなうじへ行くのに、ここへ来る馬鹿あんめえ。

本当は、盆の七日前に来たものは家へ行けねえきまりなんだげんとも、特別許してやっ
から、家へ行け」

って言うわけで、八五郎は、まず、家へ来たわけだ。

ふんで、新盆で来たんだが、仏様にあがんのもあがりずれえので、芋っぱを被^かって、
そろそろ縁側^{えんがわ}から家にあがってったと。そしたら、お父っつあん、たすき掛けになっ
てそばぶちながら、

「八五郎、おそいな、何してんだ」

って言うわけだ。コソコソ芋っぱを被^かって上がる野郎がいる。

「こらー八五郎、なんのまねしてんだ、バカヤロウ」
って、どなった。

「なんのまねだねえ、今日は俺、お客様に来たんだ、仏壇^{ぶつだん}へ上^あがんだ」
って言うわけだ。

「この野郎、なにすつとぼげでんだ」
って、お父っつあんに麵棒^{めんぼう}でぶつとばされたと。

それで、はっと気がついたと。

狐に馬鹿にされて、買った物ころっと、食われちまって、空^{から}っ手で家に帰って来たん
だど。